



『映画の切り札 ハリウッド映画編集の流儀』

上綱 麻子 著

星海社（星海社新書）

2024/07 336p 1,595 円（税込）

1. 映画の黒幕はインビジブル
2. 映画編集の知られざる魔術
3. 映画が映し出すものの正体

【イントロダクション】

映画製作を成り立たせる重要な要素として「映画編集者」の存在がある。映像素材を切り、繋げるほか、脚本に意見を述べたり、効果音を調整したりと広範な仕事で作品のポテンシャルや完成度を高めていく。米国では「インビジブル・アート（隠れた芸術）」と呼ばれる映画編集だが、その骨法とはどのようなものか。本書では、ハリウッド映画界で活躍する現役の日本人編集者である著者が、直近の仕事の様子を描きつつ、これまでに培ってきた映画編集の技法や哲学、編集者としての姿勢を伝えている。映画製作においては「監督」が絶対的な権力を握っていると思いがちだが、より良い作品を生み出すためには編集者と監督とが切磋琢磨することが大切であり、編集者は監督へ「選択肢」を与えるために編集にのぞむのだという。著者は映画編集・監督。テキサス州ヒューストン生まれ。16歳で故郷・広島を後に単身渡米。第90回アカデミー賞4部門にノミネートされたディー・リース監督作品『マッドバウンド 悲しき友情』など、多数の映画及び映像作品の編集に携わる。映画芸術科学アカデミー会員。

● 監督と編集者は作品を頂点とする微妙な三角関係

2022年の8月末、私が所属している米芸能事務所のエージェントから「X監督が彼の新作についてマコと話がしたいらしい。脚本を読んでみるか？」との連絡が入った。「X」と名前を伏せた監督は、すでに数々のアカデミー賞受賞の名作を手掛けてきたハリウッドの巨匠の一人である。

そのX監督の新作（*未公開）は実際に起きたマフィア事件の真相を探るギャング映画。その主演を務める役者も有名なハリウッド俳優「Z」（同様に匿名とする）。二度にわたってリモート面接を重ねた結果、晴れてオファーを頂いた。

映画の撮影地はオハイオ州シンシナティ。ハリウッド映画の製作は、映画が撮影されるロケ地の現場に編集スタジオを構えて、映画撮影と並行して編集が行われるのが常識とされている。撮影期間は作品によるが、平均して3～6ヶ月ほどだろうか。撮影された素材は翌日、編集部到手渡され、撮影期間中はその素材を毎日処理することが、私たちの役割である。

渡された一日分の素材は、鉄則としてその日のうちに全て編集してしまわなければならない。毎日が長距離マラソン、持久力の勝負である。バラバラでまとまりがない素材をとにかく本能のままに繋げていく。リアルタイムで素材を隅から隅までチェックした

後、使えそうなテイクを選別する作業は毎日 12～14 時間という長時間労働だが、それでも撮影中の編集は楽しくて仕方がない。

編集部の当面の目標は、エディターズ・カットを完成させること。エディターズ・カットとはその名の通り、編集者が撮影素材をもとに独断と偏見で創るカットで、基本的に脚本通りに繋ぎ合わせたものを指す。これが出来上がるまでは監督やプロデューサーなど他人の干渉なしに、編集者が素材と向き合える貴重な時間でもある。

X 監督の新作映画の撮影 3 週間目。休憩時間や移動の合間を縫ってはコーヒーを手に「How's it going?」とフラッと編集室を訪れるとソファーに腰を下ろし、目を輝かせながら私の作業を見学するのが X 監督の日課になってきた。これだけ撮影中に意欲的に編集に関心を寄せる監督も珍しい。

監督は「見せろ」とは直接言わないが、期待に応えてあげたい気持ちが先立ってしまい、「まだ未完成ですが……」と断りを入れてから見せた粗編集は、大勢のエキストラに何十台ものアンティーク車が総動員された、作品の山場とも言えるダイナミックなシーンだった。

実は、監督との相性を試すという意味で、私は名俳優 Z が演じる主人公と彼の相棒の会話のシーンに、「ある仕掛け」をしていた。相棒役を演じた役者は全くの素人（Z の旧友らしい）。プロではないので監督の演出指導にどうも応えられず四苦八苦していた。

何度も執拗にテイクが繰り返されていた中に一つだけ、台詞抜きで撮影されていたテイクがあった。それを見た私は直感で「これでいくしかない」と判断。彼の芝居を表情のみのリアクションを使って編集してみた。

勝手に台詞を丸ごと削除するという選択は、演出に関わることなので大きな賭けではあった。監督によってはそこまで演出を左右する編集を毛嫌いする人もいるからだ。X 監督が台詞なしの演出を気に入ってくれた時、心底安堵した。

そもそも編集者と監督の関係は、作品を間に挟んだ三角関係である。それは微妙なバランスで保たれている。「作品」という頂点があってこそ成立する三角関係なので、私たちが貢献すべき相手はあくまで作品である。そのためには監督も編集者も独自の視点から作品と向き合い、お互いに作品を磨き上げることが望まれるのだが、不安定な三角関係による摩擦を避けたいがために、この三角関係の並びを、監督を頂点に置き換えてしまうことも度々ある。

もちろん監督が求める映画を実現するのが私たちの為すべき仕事ではあるが、それ以上に「作品が求める映画」を監督と切磋琢磨して生み出すことの大切さも、忘れてはならない。作品のためにすべき編集とは？ それはすなわち監督に選択肢を与えることだ。

●一つのシーンを二つにカットして登場人物の内面を演出

今まで自分が編集した作品の中でも『マッドバウンド 哀しき友情』が特別なのは、あの映画が真の意味で、編集によって脚本が書き終えられた作品だったからだと思う。監督との共同作業によってあれほど脚本を進化させた作品は後にも先にもない。

同作には編集によって書き換えられた箇所が実は山ほどある。映画の中で二度登場する黒人奴隷家族の夕食のシーンがその例だ。種を明かせば、この二つのシーンはもともと一つしかなかった夕食シーンを分けて作られたものである。なぜ二つに分ける必要があったのか？

それはハップという黒人の父親の動機とキャラクターアーク（＊物語の過程で生じる登場人物の変化）をより充実させるためだった。白人で地主でもあるヘンリーと彼の使用者で奴隷のハップ。天と地ほどの差がある対照的な境遇の二人には実は意外な共通点があった。それは土地への愛情と執着心である。

ヘンリーが地主になりたいという個人的な動機はナレーションで詳細に語られているのに対して、ハップの土地への愛着と地主になりたい夢は、まるで奴隷ならそれを望むのは当然と言わんばかりに語られていなかった。

どうにかハップの土地への愛着を彼なりの世界観で表現することはできないかと模索していると、目に付いたのが夕食シーンの冒頭で彼が熱心に地図を眺めている映像だった。「これを独立したシーンとして扱えないか？」という思いつきがことの始まりだった。

最初の半分の夕食シーンを幻想的な夕焼け時にハップが独りで土地を耕している素材と繋ぎ合わせて編集したモンタージュを監督にプレゼンすると、彼女も私の意図を理解してくれた。

ハップという人間をよりヒューマナイズさせる効果を生むシーンがなければ、観客は彼の葛藤に心から共感できないままに終わっていたであろう。完璧な夕食シーンを解体し、その一部を切り離して多様化させることで、観客の感情移入を高められるのであれば容赦なく、切る。

● 中心的な「アルファ」だけでなく「ベータ」の存在を意識

「これは誰のシーンなのだろう？」と考える時、主人公だけの視点に固執せず、中心人物の背景に存在する人物にも気を配るように私は心がけている。

アメリカでは太陽のように中心的なアルファ（陰陽の「陽」）な人物こそ、ヒーローとなる資格を与えられる。アルファ派人間の表現には透明性があるから読みやすく、行動も率直で裏がないので理解しやすい。それに対してベータ（陰陽の「陰」）派人間は何を考えているのか読みにくく、何かと矛盾があって分かりづらい。必ずどこかにクセがある。

私はアルファ派よりもベータ派の人間に関心が向きやすい。アルファ人間の言語行動に反応している影の存在の心理に注目して、彼らの視点を加えることでより複雑で味のあるドラマに仕上げる編集ができるかと自負しているし、それを得意としている。

2020年、私が人生で初めて投票した米アカデミー賞の作品賞受賞作品が、韓国映画『パラサイト～半地下の家族』だった。この映画は見事、非英語作品として初めて作品賞を受賞。従来のハリウッドの前例を覆した功績のおかげで、アメリカはアジア旋風の渦中にある。実際、大手ハリウッド映画会社によってアジアを題材にした企画開発や、アジア人俳優を起用した作品が率先して企画されている。

アメリカ人はアルファの存在に感化されやすい。『パラサイト』がアカデミー賞を総なめにしたという功績があったからこそ、普段、陽の目を見ることのなかったアジア人を始め有色人種のベータ的存在の興行価値に気づき始めたのだ。勝利者にこそ評価と権限が認められるアメリカ社会のあり方は、本質的には変わっていない。

今やアジア人であることがアドバンテージとさえなりつつある米映画業界。今まで白人社会から無視されがちだったアジア人の視点、感性、才能と貢献が見直されている。やっと到来したアジアの出番を、アジア人自身がどれだけコントロールできるかが今後の課題ではないだろうか。

※「*」がついた注および補足はダイジェスト作成者によるもの

コメント：映画作品の出来栄に多大な貢献をしている映画編集だが、映画制作の本場米国でも、その重要性が十分に認識されているとは言えないようだ。本書冒頭では、第94回アカデミー賞で米映画芸術科学アカデミーが編集賞部門を主要受賞部門の生中継から除外したことが、憤りとともに触れられている（抗議を受け翌年からは復活した）。「インビジブル」や「黒子」と称される仕事には本来、「目立たないけれども重要」というリスペクトが込められてきたはずだ。陰の実力者に対する関心や傾聴の姿勢を忘れないようにしたい。